

304. 日置前廃寺の調査

はじめに

日置前廃寺遺跡は、今津町大字日置前字小谷口・西出口一帯に所在し、箱館山南東裾野の緩やかな丘陵上に造営された寺院跡であり、昭和40年の遺跡目録に「沙彌寺遺跡」として早くから周知されていた。平成元年に実施した分布調査で土壇を伴う礎石建物が確認された。平成9年度に基壇北東部に試掘坑を設定し南北方向に延びる乱石積基壇の一部を検出し、平成10年度には基壇の規模を確認するための調査を実施した。

この調査の結果、日置前廃寺遺跡は、8世紀前半に建立され、9世紀後半に瓦葺きから檜皮葺き等への屋根構造の改造が行われ、10世紀後半に火災に遭い焼失したことが判明した。また、基壇内外の埋土には細片化した壁体片（土壁）や塑像片が含まれていることが判明し、更に多量の壁体片の中に数点であるが彩色画の描かれた破片の存在が明らかになり、平成3年度に

調査が行われた鳥取県淀江町に所在する上淀廃寺の仏教彩色壁画につぐ全国で2例目の発見として注目されるようになったのである。

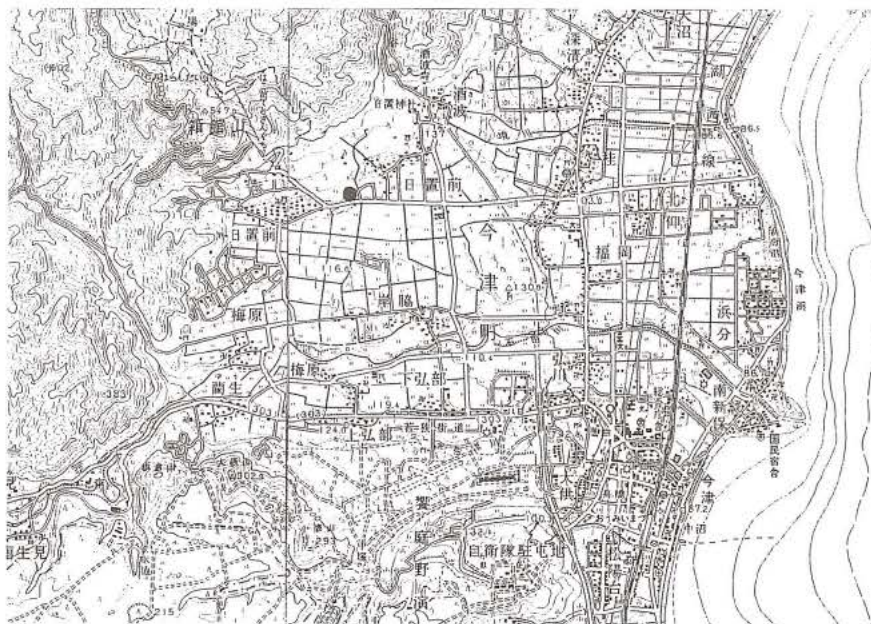
この発見が近江に70近くある地方古代寺院の一つでしかなかった日置前廃寺を、大きくクローズアップさせることになった。

伽藍配置

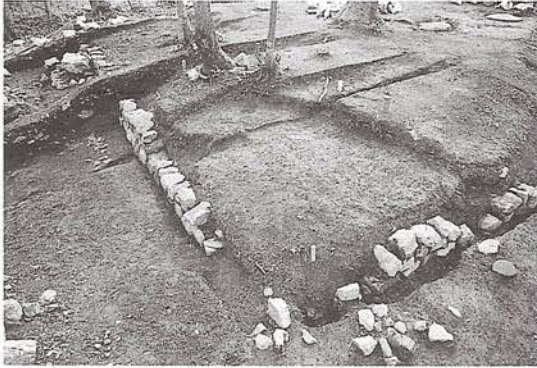
日置前廃寺遺跡は、これまでの調査の結果金堂とみられる乱石積基壇と礎石建物が検出されている。

基壇の主軸方向は西に2度振り、その規模は遺跡の西が宅地化しているため明確でないが礎石建物との関係から南北方向で15m・東西方向で18.6mと考えられる。基壇上の礎石は、0.8～1mを測る自然石6個が遺存している。平成11年度の基壇上の調査で礎石の抜き跡と考えられる浅い土坑状の落ち込みが検出され、建物は東西5間（12.3m）・南北4間（9m）の規模であったと考えられる。

また、乱石積基壇裾から東10mの地点に、9世紀後半の屋根構造の改造によって、多量の瓦類が投棄されたとみられる瓦溜の存在が確認されている。瓦溜からは、完形品を含む膨大な瓦類と奈良時代から平安時代にかけての須恵器・土師器の坏類や鉄釘・埴仏等が出土している。平成12年度の範囲確認調査の結果でも、金堂基壇の周辺には同様の瓦溜が取り巻く様に存在していることが確認され、その外側からは明確な遺構は検出されなかった。このため、日置前廃寺は金堂のみの一堂形式の寺院であった可能性もでてきた。



日置前廃寺の位置図



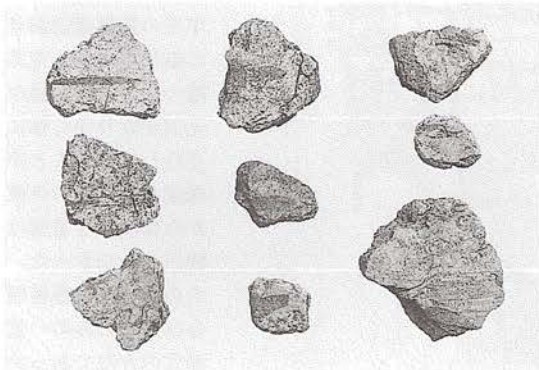
乱石積基壇検出状況（北東から）

出土遺物

1 壁体

壁体や塑像は通常土中に埋没してしまえば、土に戻り検出できない遺物であるが、建物の火災による焼け締まりにより今日まで遺存したものである。しかし、いずれも建物の崩壊や掻き出しによる物理的作用により、1 cmから10 cm程度の小片に破碎されていた。

壁体の構造は、藁を短く裁断して粘土質の土に混ぜた荒土の上に別の土を上塗りした2層構造からなり、その上に薄く白土を塗っているものがあり、厚みは2.5 cmから3.5 cmを測る。彩色壁画は、薄く塗られた白土の上に描かれているものが多い。1 cm大の小片を除く1,100点余りの壁体片の中に具体的なモチーフに結びつけることは困難なものの、肉眼で彩色壁画と確認できる破片が20点以上出土している。法隆寺や上淀廃寺の彩色壁画に使用された顔料をみると、赤系統にはベンガラ・朱・鉛丹が、黄系統に黄土など、青系統には群青、白系統には白土、黒系統には墨が使用されており、火災の熱によってベンガラや白土を除き、朱や墨は焼失し、緑青系統は黒色系に変色すると考えられている。日置前廃寺から出土した黒褐色で描かれた彩色壁画も同じように緑青系で描かれたものは変色し、朱や墨で描か



彩色壁画片

れた彩色画の多くは火災の熱で消失したものと考えられる。

2 塑像

塑像は木で芯棒をつくり、その上に荒土・中土・仕上土等の2～3層の土を順に重ねていき彫型し、彩色や漆箔を塗り仕上げる土製の仏像である。日置前廃寺で検出した塑像片は、細片のため部位が明らかで像種や大きさが推定できるものは少ないが、部位がある程度明らかなものに次のものがある。

螺髪は20点出土している。巻貝状の螺旋が刻まれ、型による成形で、頂部から両側に型の合わせ目が筋状に残っている。完形なもので高さ3 cm、底径2.3 cmで半丈六（2.4 m）程度の如来像が推定できる。

爪の表現が残る指先が1点、銅線を通した跡が見られることから指の一部と判断した破片が1点出土している。いずれもその大きさからほぼ等身大の像と見られる。

仏像の裳裾にあたと推定できる衣文片や天衣片が1 cm～5 cm大の破片で約400点出土している。丸みのあるものや段状を呈するもの他に、彩色・漆箔の痕跡の残るもの・宝相華文等が描かれた破片が出土している。

また、塑像の剥離面に布目の残るものや木質部に直接貼付された形跡のあるものも確認でき製作技法を知る手がかりになるものがある。その他、宝玉形等の装飾片が出土している。この宝玉形装飾片の裏面は浅い凹面をなし、円柱状のものに貼付された形跡がある。



瓦溜出土埴仏

3 埴仏

9世紀後半代の屋根構造の改造により、大量の瓦が投棄された瓦溜から、多量の瓦にまじり埴仏片1点出土した。これは、屋根構造の改造が行われた際、不要となった大量の瓦とともに、堂内の不要品も瓦溜へ投棄されたからと考えられる。堂内を荘厳するものに繡仏や彩色仏教壁画・埴仏などがあるが、そのいずれかで荘厳するのが、一般的であると考えられてきた。

したがって、彩色壁画と埴仏がともに出土している点に注目できる。

4 瓦類

軒丸瓦は、複弁八葉蓮華紋のみであるが、範の違いから2種類に分類できる。両タイプとも直径は19.8～20.3cmを測り、周縁は直立縁で無紋である。中房直径は7.5～8.0cmを測り、蓮子は1+4+8である。Ⅰ類は、中央からやや離れた位置に範割れの痕跡がみられ、焼成は堅微で色調は青灰色で須恵質に仕上がる。大津市滋賀里の崇福寺跡から出土したと伝えられるものに極似たものがあるが、これには範割れの痕跡はみられない。Ⅱ類は、Ⅰ類に比べ中房の蓮子は小さく不鮮明で弁の大きさも均等さを欠き、間弁を抜くなど雑な作りである。やや甘く色調は灰白色である。

軒平瓦は、無紋（ヘラ描き螺旋紋含む・Ⅰ類）と飛雲紋軒平瓦（Ⅱ類 - a・b）が出土している。焼成などから軒丸瓦Ⅰ類と無紋の軒平瓦が創建時のセットと考えられる。飛雲紋軒平瓦（Ⅱ類 - a）は燻し焼き風で色調は灰黒色に仕上げ、Ⅱ類 - bは燻し焼き風にはならず、色調は灰白色や浅黄橙色に仕上がる。範は同じであるが調整等に違いがあり別の窯で焼成されたと考えられる。

上述のようにⅠ類とした須恵質に仕上がるものが創建時のもので、Ⅱ類 - aとした燻し焼き風に仕上がる瓦がこれに続くものと考えられる。しかし、本来セットになる飛雲紋軒丸瓦や燻し焼き風に仕上がる軒丸瓦は、これまでの調査では出土していない。近江系と呼

ばれる飛雲紋軒平瓦は、大津京関連寺院や近江国衙関連遺跡から出土しているが、いずれもこれとセットになる飛雲紋軒丸瓦が出土している。日置前廃寺の場合は、軒平瓦Ⅰ類とした無紋の軒平瓦にかわる差し替え用に採用された可能性がある。

以上日置前廃寺から出土した遺物の概要を紹介してきたが、冒頭の土淀廃寺では、これまで、寺院を荘厳する仏教彩色壁画は、法隆寺や平城京の大寺院にしか存在しなかったと思われてきた壁画が、地方の一寺院にも存在したことを証明した画期的な発見であった。また、金堂の本尊に塑像の如来像が置かれ、その脇侍に菩薩や神将等の塑像群が安置され、その背後を仏教彩色画で荘厳するという堂内の情景が具体的に復原されている。現段階では質・量共に劣るものの今後の調査・研究によって同様の復元が可能な貴重な遺跡であることに違いはない。

日置前廃寺の造営者

ここで問題になるのが、日置前廃寺創建の時期である。県内の多くの古代寺院が7世紀の第4四半期代に地方豪族の氏寺として建立されたものであったが、これらの時期からやや遅れて律令体制の整備が地方に進む段階に日置前廃寺が造営されたものと考えられる。

日置前廃寺の東に近接する、都市的な広がりをもつ大規模な官衙遺跡である日置前遺跡は8世紀前半に整備がはじまり、8世紀中頃を前後する時期には高島郡を含め都市的な広がりとも機能をもつ官衙的色彩の強い大規模な官衙遺跡として存在している。この官衙遺構の区画施設等の主軸方向と日置前廃寺遺跡の金堂の主軸方向が一致していることから、これと同時期に日置前廃寺も整備・造営された可能性があると考えられる。

近江国衙を中心に出土する飛雲紋系の瓦類が日置前廃寺から出土していることは、当時近江国司を兼ねていた藤原仲麻呂の配慮により、近江国衙の官営工房や工人等の関係があったと想定できる。

藤原仲麻呂と高島郡の関係は深く、『続日本紀』天平宝字六年二月二十五日条に、高島郡の鉄穴を賜るという記載からもわかる。また、天平宝字8年(764)藤原仲麻呂の乱の際、越前に逃れる仲麻呂は日置前に居をおく「高島郡前少領角家足」の館に宿泊している。角氏は、仲麻呂が授かった「鉄穴」の管理経営を行っていたと考えられており、官軍に追われ万策尽きた仲麻呂が最後の選択肢として頼ったものと考えられる。

このような点から、角氏が日置前廃寺の造営に関わった可能性が高い。しかし、日置前という地名や社名等から、近江に直接日置氏を記す史料はみられないが、近接する越前や山背・出雲の史料等に現れる「日置氏」との関係も注目される。日置氏についても鉄製産や官



複弁八葉蓮華紋軒丸瓦



飛雲紋軒平瓦

営の倉の管理を司る業務に従事していた氏族といわれており、角氏とともに日置前遺跡の経営やこの官衙に付随する寺院として日置前廃寺が造営された。

まとめ

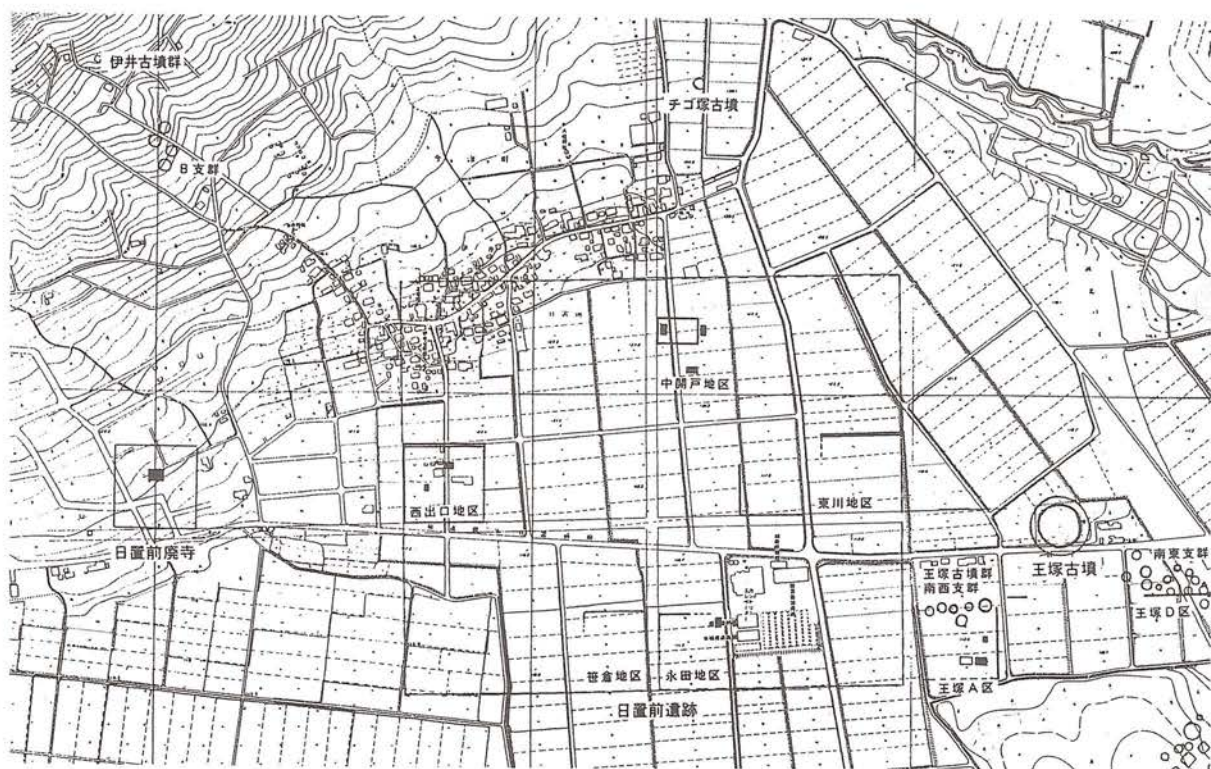
日置前廃寺は、上述のように仏教彩色壁画や埴伝で荘厳された寺院であり、官衙付属寺院として造営・整備された可能性が高い。地方の寺院における壁画等の荘厳が、特殊なものであったかどうかについては再考を要するが、特殊なものであったとして日置前遺跡群の性格を考えてみたい。すなわち、「日置前」は、北陸道という官道で結ばれた若狭国・越前国の結節点に位置し、その地方行政を担う生命線的な役割をもつ遺跡であったのではないかと考えられる。

近年の北陸道に関する研究では、北陸道の筆頭の国は若狭国であり、本来の北陸道は若狭国を経て三方や美浜を通り越前国へ抜ける周行ルートであったと考えられている。その後、延暦14年(795)に近江国・若狭国の駅路の査察(「日本紀略」延暦十四年六月辛卯条)があり、それによって駅路の変更が行われ、近江から直接越前へ向かうルートに変更された可能性が高いと考えられている。しかし、このルートの改変にかかわらず北陸道に近接する日置前遺跡群は、北陸諸国に來

着し、都へ向かう渤海の外交使節団を迎え入れた官衙施設としての機能も果たしていた可能性は十分考えられる。

渤海使節来朝の記事は、神亀4年(727)国書を携えた使者の日本への派遣から926年に渤海が契丹に破れて滅亡するまで使者の来朝は35回にのぼった。天平宝字2年(758)の使節団は、最初9月に越前国に招かれ、12月に平城京に入京している。松原客館における渤海使の迎接は越前国司にとっての重要な仕事であった。能登・加賀・越前・若狭国など北陸道諸国に使節団が来着したのは12回にのぼり、これらの使節団が京に向かうには必ず、近江国高島郡を通るのである。松原客館から峠越えて近江に入り、最初の休憩・宿泊所として日置前廃寺・遺跡が機能していたことは、十分考えられる。

元慶7年(883)には、渤海の客を京に迎えるため、山城・近江・越前・加賀等の国の官舎や道橋を修理し、路傍に遺棄されている死骸を埋葬させたことが記されている(「日本三代実録」元慶七年正月二十六日条)。9世紀後半代における日置前廃寺の改造や、マキノ町の小荒路十寺遺跡・高島町鴨遺跡などの官衙的色彩の強い遺跡の出現もこれに符合したものではなかったかと考えている。(葛原秀雄・弘部亮二)



日置前廃寺・日置前遺跡の位置図および周辺地形図(S = 1 / 10,000)